

蒙疆より河南へ 後編(二)

東京都 川村 傳

五月十日頃と記憶しているが、洛陽から敵の一部が西安方面目指して脱走を図ったとの情報に、我が部隊は洛寧街道を追撃、前進することとなった。我々の機動力を以てすれば訳なく追いつけると意気込んで出発した。しかしそれまで霸王城以降よい天気が続いていたのが一転して雨となった。

この辺は、いわゆる黄土で、非常に粒子の細かい沖積土だから粘土に水を加えたも同様ヌルヌル滑って車は全然動かない。「防滑鏈、装着！」の命令でチェーンを取り付けても、本来チェーンは雪

や氷のために作られたものだから、全然役に立たないどころかエンジンを吹かすど泥水をあげて土を掘り、後車輪まで埋まってしまう。滑り止めに砂利を入れようにも砂利はどこにも見当たらない。このままエンコしていたら朝になって敵機の絶好の目標になってしまう。一晩かかって二キロと進めなくて何の機動部隊かと情け無くなる。少なくともキャタピラ付きの車両か後車輪二軸の六輪駆動車にすべきである。

この追撃作戦は、この雨と云う極く普通の自然現象によって、スタートから齟齬そごを来した。二日間降った雨が上がって、五月の強い陽光により昨夜まであのヌルヌルであった泥道が、今度はコチコチに固まり、逃げそこなった敵の荷馬車が車両

を泥にとられたまま通過の障害物となる。人馬の屍臭が物凄くて食事も喉を通らず、吐き気や頭痛に堪えられず、被甲（防毒面）を装着して作業していたら、通りかかった下士官が文句を言っていた。

道は次第に山岳地帯を通るようになり、谷は深くなり、敵は谷川に架けてあった橋を爆破して退却して行ったため、車両部隊にとってはこれが大きな前進の障害となる。砲なら分解搬送も出来るが車両となると分解や組立てに手間や時間が掛かってどうにもならぬ。そこで両岸を崩して急斜面を作り、先ずキャタピラのついた車を通らせ、その後をすぐ自動貨車を通そうというのである。積荷は出来るだけ人力で対岸に運び、車両には太い綱をつけて三十人位が取り付けて引上げようと言うのである。

乗馬や徒歩の部隊であったなら大した手間もかからないのに、平地ではあれ程の機動力を發揮して敵に防御のいとまを与えず破竹の勢いで進撃し

た部隊が、地形の変化でこんなに苦労するとは。

馬力を最高に上げるために、マフラーまで外して、飛行機のような爆音を上げる車を人力で引きずり上げるのである。いわゆる「人車一体の進撃」とは言いながら、馬鹿げた努力で無理をするから故障も出る。クラッチを滑らせてしまう、車推進軸（プロペラシャフト）の自在接手（ユニバーサルジョイント）を壊すと、次々に足回りのトラブルが出る。

我が分隊の車も後車軸の締め付けボルト、全浮動軸（フルフローティング）のリヤーシャフトのフランジとハブを締め付けているボルトが折損して、後車軸が空回りをしてしまうのだ。置いて行かれたら夜間敵の敗残兵に襲撃されて全滅だ。崖の中腹から手榴弾の二、三発も投げ込まれたらそれで終わりである。

ハブの中に折れ込んだボルトにハンドドリルで穴をあけ、逆タップを掛けてやっと抜き出し、新しいボルトと交換しても三角ワッシャー（テーパ

「ワッシャー」とハブの穴の間にガタが出来て、六本のボルトに平均の力が掛らないから、一番負担がかかっているボルトから次々と飛んでしまうのだ。

夜になると、バッテリーから電源をとって豆電球の光を頼りに必死になって修理する。敵襲に備え、押収品のチェコ製機関銃に弾込めたのを傍に置いての作業である。こんなことで遂に西安までは到達出来ず、反転の命令で再び洛陽目指して進み、郊外の道路脇に車を駐めて、本隊の到着を待っていた。

明け方ドアを叩く音がするので、窓をあけると、「お前等、ここで何しているんだ！」と懐かしい中隊長の声である。「本隊に合流のため待機しておりました」と大声で答えると「前進だ！ 洛陽目指して前進だ！」と命令された。これが中隊長の声を聞いた最後となった。この数時間後、洛陽西站（西の停車場と機関庫）突入の前に狙撃され、頭部貫通銃創でM中尉は戦死されたのである。

つかない人命の犠牲と破壊は何のためだったんだろうと、目的の達成感どころか、今までの心身の疲労がドツと出た感じで、気が滅入るばかりであった。

明けて五月二十六日、中隊長の遺骸を対戦車壕の中で茶毘に付した。長身の真面目一方の隊長であった。幹部候補生で現役志願をしたとも聞いていた。双眼鏡で敵状を見ようとしたとたん狙撃されたらしい。弾丸は鉄帽のひさしの一センチ位下から両目の間を貫通し、鉄帽の後部が大きく割れていた。二センチ鉄帽が下っていたら助かっていただろうと思う。

当番をしていた神保上等兵に拳銃の弾丸抜きと手入れを頼まれて中隊長の拳銃を見ると、ローリングの真新しい、よく手入れされた銃で、ガンブルー仕上げのF/Nのマークの入った純製であった。当時の国産品の銃と比べるとさすが国際的商品だけに格段の美しさで工業水準の差を感じさせた。弾倉を外して銃口を見ると一発も射つてな

七里河を越えて洛陽に近付くと、砲撃の真最中で十五センチ榴弾砲や十センチ榴弾砲の弾着で黒煙濛々、ズシン、ズシンと腹に伝えるような音がして心強い限りである。あの砲撃の最終弾を合図に突撃だと思っていたら中隊長戦死の報告があった。次で車両係の平賀軍曹が足を負傷して下つて来た。「中隊長の仇を討つ」ととても興奮していた。やがて西站突入となって我々自動車手も一四四〇発の弾薬箱を背負って西站へ向かった。

丁度、坂田上等兵が負傷し、麻生上等兵とK上等兵が助けようと担ぎ上げたところ、K上等兵が撃たれて即死、麻生は水筒を打ち抜かれて助かった。夜にはなるし市街地は建物で見通しがきかず危険であるので安全な所まで後退した。夜明け前までに敵機の来襲を警戒して七里河西方の空車位置まで後退した。

あれ程「洛陽へ、洛陽へ」と目指したが、今は陥落して静かになり、中隊長はじめ多くの戦友を失った淋しさと空しさが残って、この取り返しなかった。

翌日、戦場掃除の支援と言う任務で七里河を渡る途中、敵機来襲、対岸を爆撃して去った。急いで駆け付けるとそこは修羅場で、燃えている車両、負傷者を搬送する患者収容隊が駆け回っていた。聞いたような声があるので顔を見ると、一クラス下の中田正雄君である。二年振りの再会であるが時と場所だけに再会を約して別れた。戦死者の火葬の煙で敵機に発見されたとのこと、地上戦で勝っても制空権がなければ機動力も發揮できず、夜こそソコ動き回らなければならないことは情け無いものだ。六月半ばまで郊外の行李村に駐屯した。

六月二十日出発、敵機の来襲を避けて夜中に走り、二十三日、鄭州郊外の蘇家屯に入り、車両整備及び魯山の連隊本部との連絡と兵員、燃料の輸送等に当る。

七月中旬、中村少尉の指揮下に入り、補充兵を乗せ、許昌を経て葉県へ行く。途中渡河点にて兵長に進級し、葉県の連絡所勤務となる。中隊長は

大沢中尉から真田中尉に代わり、十三キロ西方の部落老鴉張に駐屯した。葉県の東側に湯温伯軍の兵舎があり破壊跡の整理をやっていた。葉県は大きな県で、南陽街道の要路に位置し、農産物の集散地として繁栄していた。

ここには武装した整備隊があり、これがいつ反乱を起すか分からない等の風説も流れ緊張した晩を過ごしたこともある。このあたりは晩秋でも気温は十度以下に下がらずしのぎ易かった。

困ったことは戦闘以外に使用する場合に支給される代用燃料による故障であった。代用燃料とは粗製アルコールのことで、豊富な高粱酒を蒸留してアルコールの純度を上げ、兵隊が飲めないようにガソリンを少し混入したものである。これを使って連隊本部への連絡や貨物、兵員の輸送をした。

ある時、助手がクランクケースのレベルゲージを抜いて見て首をかしがせているのを見て「どうした」と聞くと「潤滑油が増えています」と言う。

そんなバカなど油の量を見ると、マークの上まで

が流行した。飲料水の水質が悪いため消化器障害で栄養失調となる兵隊が多くなった。私も腹の具合が悪くて体重が次第に減り、帯革の穴が二つも減る有様であった。入院する施設は無かったが連絡所勤務は忙しくなく演習や歩哨勤務等なかった事が幸だった。

私は体調に関しては臆病な位細心なので、煮沸しない水は絶対飲まない、食事はよく噛むこと、アルコールを飲まないこと、果物や生野菜を食べないことなどを守り、決して食べ過ぎないように注意した。私の隣に寝ていた一年若い一等兵は、無口で温和な兵隊だったが、鳥のように痩せて青白く、皮膚が縮細皺が寄って眼が窪んで大きく、私より重症で動くのが億劫な様子で、とうとう医務室へ入室したが死亡した。こんなに故郷から離れたところで十分な医療も受けられず死んで行く寂しさはどんなであつたらうと涙が出た。

やがて中隊に帰って見ると、M上等兵戦死、石井上等兵負傷などいなくなった人員、河南戦の負

あり粘度も薄くなっていく感じ。「失敗した！」燃料ポンプのダイヤフラムだとピーンと来た。どうも最近気化器のダイカスト部品が白く腐食したりしていた。燃料ポンプを分解して見ると果たせるかなダイヤフラムに裂け目が出来ている。車両係に問合せでも在庫はないと云うので、とりあえず皮を使って見たが温度が上がるので皮は固くなり縮んで裂けてしまう。手元には耐油性、耐久性のある物は何もない。

何か手に入る物で使えるものはないかと考えている内に、子供の頃使用して氷嚢を何枚か重ねて使つてはと思つたのである。中国の薬局にもあると思つて探させたらあつた。これを三枚重ね、取付て見たら快調子、やれやれ助かった。一つの部品が欠けても車両は動かなくなる。機械化が進んで戦力が増強されても、部品や燃料資材が充分に補給されなければ、精神論だけではどうにもならぬことを痛感した。

食糧の補給は次第に悪くなり、また悪性の下痢

傷から回復して帰隊した人々、それに補充兵など大分変動があつた。そして正月を迎え、次の作戦開始に備えて準備をするため、中隊のシリンダーブロック六個のボーリングのため五人の兵隊と許昌へ出張することとなった。

シリンダーブロックは許昌の自動車廠でボーリングを完了、中隊に帰つてエンジンを組み立て次の作戦の準備をした。

三月二十二日、いよいよ明日出発ということで作戦用のガソリンを支給されエンジン調整を行った。途端、異音と共にエンジンが不調、一番が失火（ミスファイアー）していると見て点火栓を抜いて見ると案の定爆発してない。バルブの突き上げがどうもおかしいとヘッドを外して見ると、一番のピストンの上部に十円玉程の穴があいている。何たることか、鑄鉄のピストンに素があつたのがエンジンを組み込んだ時はアルコールで爆発力が弱かつたので持ちこたえたのが、ガソリンの強い爆発力で穴があいてしまったと判断された。部隊は

次々と出動して行くのに取り残されてしまう。

ピストンを徹夜で交換、エンジン調整を済ませ、昼間、敵機から遮蔽のため入念に偽装して朝を迎えた。部隊が出動した後は、私の車と一緒に本隊へ追及する車両がもう一台、城壁の衛生所の傍に偽装網を冠って駐車していた。

太陽が昇った七時頃、頭上でいきなり「ダツ、ダツ」と機関砲の音が聞え、エンジンの轟音と共に地上スレスレに攻撃して来る戦闘機が見えた。すぐ一メートルばかりの土壁の蔭にピタリと伏せた。頭の上は火を吹く曳光弾が空気を物凄く震動させ、土壁の反対側は弾着の土埃で濛々である。敵機は大きくバンクして旋回し、乗員が風防をあけて体をのり出しながら掃射の効果を確認しているようである。散弾銃でも持っていたら一発喰わせてやりたい程の近距離だ。

このような時は絶対に動くな、高速で動いている飛行機からは発見されない。動くと見付かり易いと教えられていたから、低い土壁にピタリく

兵を助手に行動するのかと思うと暗澹たる心境になった。

午後、麻生上等兵が帰って来て、岡野を無事に患者收容隊に送り届け、本人の意識もすっかりしており、生命に別条はないだろうとのことで安心した。真面目な岡野は動かずジツト伏せていたら安全だったろうに、銃を執りに室に駆け込んだために災難に会ったのだ。しかし屋根を貫通した弾丸の弾身でなく、表面のブロンズのめくれ反ったドーナツ状になったものだったから、傷口は大きかったが浅かったので助かったのである。

夕暮を待って、本隊へ追及するため二両の車は灯火を消したまま星明かりを頼りに出発した。敵は夜間の銃爆撃にロッキードを使い出したとの情報があったからである。翌々日、師岡で本隊に追いついてホツとしたが車の調子がおかしい。推進軸のあたりで鈍いガツガツという音がする。師岡に数日はいるようなので、偽装の蔭で推進軸の分解をやってみた。私が担当していた車は一三九

つ付いていた。誰か駆け回る足音がしたので「しまった！」と思った途端、二回目の掃射で小さな一室から煙が上がり、中から一人飛び出して跳ね回っているのが見えた。「あっ岡野ダツ」私の助手である。思わず飛んで行って城壁の下に掘った防空壕へ引きずり込んだ。背中をやられている。俯けに寝かせて第二種作業衣の背中を裂いて見ると出血がひどく、肺から空気が洩れるのか呼吸すること泡が出て来る。

包帯を取り出して滅菌ガーゼを当てて見たがそれは出血の中で浮いてしまう。そこで三角巾を畳んでその上に押しつけ、もう一枚で圧迫包帯をし、同年兵の麻生上等兵に十二キロ離れた患者收容隊まで送ってくれと頼んだ。剛胆で実行力のある彼はすぐ引き受けてくれた。

粗末な部品一個のために出発が遅れ、しかも重傷者を出してしまった。岡野は入隊前に修理工の一人前の職人で、私の有能な助手であったから、これから始まる大作戦には、私一人で素人の補充

年型の「トヨタGB型」、中隊の他の車は皆KC型で、いわゆるホチキスドライブでプロペラシャフトがむき出しである。

しかしGB型は旧式のトルクチューブタイプだったので、自在接手（ユニバーサルジョイント）も推進軸もハウジングに入っている。そして後車軸の推進力がスプリングハンガーを介してフレームに伝わるのではなく、三角ロットと称する棒が二本リアアクスルハウジングからクロスメンバーに出ている、窮屈な壕の中で分解には手間が掛かった。結局ミットギアのボールベアリングが悪くてエキセントリックな回転をするため、ジョイントのヨークがハウジングに当たってそれを削っていたと分かった。しかし例によって部品がない。

ベアリングのボールを等間隔に保つスペーサーを、整備中隊に頼んで鉄板で作ってもらって間に合わせた。絶えず水洩れするウォーターポンプ、バッテリーが内部放電するのでオーバークールまでやった。とにかく手のかかる車である。派遣軍

の虎の子と称せられた機甲師団がこの有様では本
当に情け無い。修理修理で苦勞する上に部品が不
足で本当に困った。

食糧の補給も充分でなく、食糧を探しに行つて
敵と遭遇し二人もの戦死者を出し、また内郷へ受
領に行つた帰り道で手押し車が地雷にやられ、H
上等兵が戦死する等の不幸が続いた。これから先
は敵の空軍力や道路の状況から車両での行動は無
理であるとの判断で、浙川方面へは徒歩で前進す
ることになり、私は九二式重機関銃の分隊長とし
て丸山准尉の指揮下に入ることになった。

永らく行動を共にして来た矢部少尉は、本土防
衛軍小隊長要員として内地へ転属となった。九二
式の重機は命中精度はよく、装弾も保弾板式で故
障も少ないが、重いのが難点であつた。分隊長は
属品箱と十字嘴に十四年式拳銃という装備である。
この属品箱は鉄板で出来た細長い箱で案外取扱い
難い。また皆を疲れさせないために四人で搬送し
たり、分解搬送して見たり、訓練を兼ねているい

モハン事変敗戦の真相、ソ連機甲部隊の圧倒的な
物量と装備と威力にいいよ立ち向わなければなら
ない時が来た。火力でもはるかに劣っている。

九五式に三七ミリ砲。九七式に四七ミリ砲が装
備されているが、ソ連の大口径の砲の威力には及
ぶ可くもなく、ドイツ降伏で西部戦線で活躍して
いた戦車が大量にこちらへ回つて来るとすれば数
量的にも圧倒的な格差があると想像された。

しかもドイツの機甲部隊と渡り合つた精鋭部隊
に対し、我が戦車部隊は大規模な機甲部隊同志の
ぶつかり合つた戦闘の経験はない。こんな不安は
誰も心の中にはあつたろうが、野戦暮しも四年目
となり、いよいよここで死に場所が出来たという
覚悟のようなものがあつた。

車両を積む無蓋貨車が不足なので、有蓋貨車を
分解して車両を積み込む作業を敵機の空襲も恐れ
ず強行している内に、ハタと空襲がなくなつた。
と一日経つて作業が中止になり、何だか気の抜け
た様などころへ、戦争が終わつたらしいとの情報

ろやつて見た。

幸なことに有力な敵に遭遇しなかつたが、一個
分隊で独立して行動するには、九五式の軽機か押
収品のチェコのブルノでも持つた方が余程心強く、
敏捷びんしょうに戦闘出来ると思つた。携帯兵器も十四年式
の拳銃では心細く、これで戦うようになつたららも
う命はないと思つた。私は扱い馴れた四條腔線の
新型三八式が大好きだつた。連隊の射撃大会の限
秒射撃で入賞したことがあるし、体の一部である
ようにさえ思っていたからである。

毎日の行軍はなかなか辛かつた。出発前から車
の故障に悩まされ、しかも重機分隊として毎日行
軍した。遠くの方で爆撃らしい音が聞こえたりは
するが地上の敵には遭遇しないままに、急遽師団
へ後退するよう命令を受け、懐かしい葉県を通つ
て許昌へ到着した。

その頃までに誰言うもなく「ソ連参戦」のニュ
ースが拡がり、初年兵の頃から訓練された対ソ戦
のこと、また陸軍が今までひた匿かくしにしてきたノ

が流れた。

八月十八日頃「軽率妄動を慎むように」との中
隊長の訓示があり、皆呆然自失、今まで張りつめ
ていた心のゆるみと、これからどうなるかとの不
安が入り交じつた解放感と無力感に魂の抜けたよ
うになつた。

中には陸軍士官学校出の若い筋金入りの中隊長
が

「日本は敗けても我が中隊は負けてはいない」と
張り切っているのを冷やかに眺めるばかりであ
つた。しかし現実には急速に展開し出した。我々が
俸給として貰っていた儲備券チヨビケンが暴落した。街の商
店で「不行」と言つて受け取つてくれないのであ
る。その代り今までただ安かつた老票が数十倍に
なつたのである。通貨価値の激変をはじめて経験
した。

北京へ集合の命令で貨車に積める物は積み、自
動貨車の大部分は黄河の支流の河岸に整列させて
別れを告げた。生死を共にし受領してからエンジ

ンも足回りも修理に修理を重ねた愛車を置いて行くのは辛い思いであった。

我々を乗せた鉄道は、鄭州、開封、除州を過ぎ済南へ向かった。途中レールが外されていたりして案外手間取り、九月半ばにやっと北京に着き、豊台の貨物廠へ入った。兵器の菊の御紋章を鑿のみで壊してまとめたが、無線所や駅の警備に駆り出された。鉄道の警乗兵も出た。敗戦後になって北京へ輸送されて来るアメリカ兵の鉄道警備をするとは妙な気持ちがあった。

黄村の駅の警備をしている時、勤務時間外は暇なので、天津まで行く警乗兵に頼んでカレー粉を買って来て貰い、子供の頃母親が調理をしていたのを思い出してカレーライスを作ったら、分隊の者が皆喜んで食べてくれた。ちょうど人事係の准尉が来たので一緒に食事をした。

そこで料理が出来ると思われたのか豊台へ帰ったら中隊の炊事班長にされてしまった。学生時代寮の炊事当番や学園の那須農場建設のキャンプで

外部からの情報はよくは入らないが原子爆弾のことなども広島は向こう百年間は草も木も生えないだろうとか、船が足りないから外地にいる兵隊が帰国出来るのは何年も先のことになるだろうと言われて、現在は食糧に事欠かないが先の事を考えて仔豚を飼うことにした。調理の屑や残飯の処理を合理的に行うためである。

兵器も大方返納してしまい勤務に必要な数しかない。語学教育も始まったので仕事の時間の合間を見て出席して見た。四年間も英語から離れてすっかり忘れていたと思っていたが、プリントを読まされた時「発音がいいね」とほめられた。敵性語などと言われ、ご法度であった英語がまた役に立つとは。何方国語が出来た父親が「いつかきつと役に立つ」と教えてくれたのに向努力をしなかった自分を恥じ申し訳ないと思った。

無理に入れられたのではなく、日本軍が自発的に設置した収容所で、外部からの束縛もない生活ではあったが、目的のない生活はまた味気ないも

自炊をしたことはあったが、軍隊での経験はなかったもので、炊事班長は「ご勘弁をと言ったがどうにも逃げられない。お前は監督だけすればよい、各小隊からよい兵隊をつけてやるからと言って「軍隊調理学」という分厚い本を渡された。点呼も消灯もない。材料は豊富で野菜でも肉でも手に入る。約束通り真面目で気の利く兵隊を集めてもらったので仕事が楽に出来る。設備も、こんなかまじ電気が欲しいと言えばすぐに造ってくれる。また本部や医務室から当番兵等が食料や調味料を貰いに来るが、その代りこちらの必要なものは大抵揃う。炊事班と言う所は裏方ではあるが便利な所でもある。

師団、連隊、大隊や、通信等に分遣、派遣になっていた者、果ては衛戍監獄にいた者まで中隊に入ってきたので、中隊の人数は戦闘中の倍以上にも膨張したが班員は実によく働いてくれた。兵隊は食事だけが楽しみなので、何か変わったものを食べさせたいと思うが、手のこんだ調理はなかなか困難だ。

のでもあった。何年もこんな生活をした上、去勢され奴隷にされるのだ等という風説も流れた。

その内、十一月末になって、急に内地へ復員の情報が流れた。行動の寸前まで知らされず急に行動させられるのは軍隊の常であったから驚きもなかったが、いよいよ乗船間際にはじめて敗戦を味わった。今まで遠慮勝ちだった中国兵が我々の荷物を検査して目星しい物はどんどん取り上げた。時計等は全部取り上げられた。LSTでは船底の車庫に入れられ、二丁の重機関銃が十字砲火を浴びせられるよう設置されていて、甲板へ上がることは禁止され、「命令に従わない者はその場で射殺する」と海兵隊の士官から言い渡された。

米は持っているが炊飯は出来ないのでスチームの釜を借りることになり、私はまた炊事室にいることになった。こじんまりした清潔な室で、調理には高圧蒸気を使う。炊事班長はじめ兵隊達は気分のいい人達で、好奇心のかたまりでもあり、なにかと質問攻めに会った。乗船前、鉄道輸送に乗

っていた米陸軍の兵士が「海兵隊の奴等は気が荒いからお前達酷い目に合わされるぞ」と脅かされていたのだが。

艦内の検査があるらしく、掃除とペイントの塗り替えを手伝わされた。こちらの兵隊もよく働き、向こうの下士官も大いに満足し、ショートケーキを振る舞ってくれた。溘沽から三日余りもかかったので南方へでも連れて行かれるのではと心配もあったが、南風崎に上陸した時の嬉しさは何ともたとえようがなかった。

これから始まる、復興のための耐乏生活が二十年近かったが、考えて見れば二十歳になって軍隊に四年、復員から二十五年間は苦勞して高度成長を経験し、さらに三十五年経って今日に至ったのである。

【解説】

師団は洛陽攻撃に着手、洛寧から前進、追撃が始まる。

加し、戦車第六旅団は戦車第十三連隊、第十七連隊の主力をもつて、七月から湘桂作戦に参加、終戦時、戦車旅団は湘桂作戦を終了して北京へ移動中で、師団は北京地区にあった。既にその時点で張家口付近にはソ連軍が南下しつつあった。

そして八月十八日頃「軽拳妄動を慎むように」との中隊長の訓示があり、皆呆然自失、解放感と無力感に魂の抜けたようになった、と終戦の衝撃を語る。また『北京へ集合の命令で貨車に積める物は積み、自動貨車の大部分は黄河の支流の河岸に整列させて別れを告げた。生死を共にし、受領してからエンジンも足回りも修理に修理を重ねた愛車を置いて行くのは辛い思いであった』と哀感をも語っている。

『この追撃作戦は、二日間降った雨が上がり、泥道が、コチコチに固まり、逃げそこなった敵の荷馬車が通過を遮り、道は次第に山岳地帯となり、谷は深く、谷川の橋は爆破され、戦車と車両部隊には大きな前進の障害となる。積荷は出来るだけ人力で対岸に運び、車両には太い綱をつけて三十人位で引上げようと言う。平地であれ程の機動力を発揮して敵に防御のいとまを与えず破竹の勢いで進撃した部隊が、地形の変化でこんなに苦勞するとは』と機動部隊の苦勞を記している。

この作戦は約千四百キロの連続機動を伴った強行作戦で、体験者が語るように、地形も戦車の行動には向かず、参加した戦車の内約九十両が故障したとの記録がある。筆者は修理中隊に属していた関係で、この故障の修理に苦心したことを詳しく記録しているが、戦車師団としては、歩兵との連携により統合戦力を発揮した戦鬪として、これが最初で最後の作戦であったといわれる。

昭和二十年三月、師団の主力は老河口作戦に参

徴兵検査より復員まで

神奈川県 高橋悦二郎

「第一乙種合格」昭和十五（一九四〇）年、横浜で行われた徴兵検査場にて徴兵官よりこう宣告された。続いて「貴様の希望兵種は何か」と言われ耳を疑ったが、即座に口から「通信兵」と言う言葉が出た。それは私が私立の無線通信学校で通信技術を修得していたからにほかならない。しかし甲種合格でなく、第一乙種だからと兵役には関係ないと思っていたが、確か昭和十五年の秋頃、横浜連隊区より、「昭和十五年十二月一日、北支那派遣電信第十連隊へ入隊」との通知を受領し、同年十一月の末、近隣の方々に送られ集合地の横浜駅に向かった。

同駅には各地より集まった新兵と憲兵が多数いて、物々しい雰囲気があった。点呼後、列車に乗車、窓は錠戸が下され、外は見えず、ただ列車は